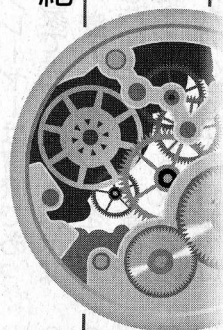


越境精神

小長谷 有紀



梅棹忠夫の残したもの

5

梅棹忠夫は偉大なリーダーのもとに育ち、その傘下から脱け出すことによって別天地を開拓した人である。

彼が探検の道を志したきっかけは、中学生のときに観た今西錦司らによる中朝国境の白頭山の冬季初登頂の記録映画であった。やがて大学生になると、6人の友だちと「ベンゼン核」と称して集まり、今西先生をかつきぎあげて探検家集団を結成した。そして、ミクロネシアのポナペ島や中国東北部の大興安嶺を探検した。

このように、梅棹は今西のもとで探検の経験をつんだので、今西が90歳で亡くなったとき、追悼文でそのリーダーシップを賞賛している。

「団結は鉄よりもかたく、人情は紙よりもうすし」という当時のモットーをのべて、人間関係のさわやかさを紹介した。言い換えれば、リーダーの差配を信頼しながらも依存しない、フォロワーたちの自律性も賞賛していた。

しかし、だからといって今西派として一括して扱われることは梅棹の望むところでは

信頼しつつ依存しない



ない。少なくとも、今西が開祖となった霊長類学の弟子ではなかったし、私生活でも年始の挨拶に訪問する間からではなかった。

「ベンゼン核」の一人である吉良竜夫は「梅棹著作集」第3巻『生態学研究』の巻末で「生態学をやっているかぎり今西さんの傘の下をぬげだせないという状況が、意識的に無意識的に梅棹を人間研究に向かわせた、という見かたもできるかもしれない」と解説している。

今西と梅棹の間には学問上

の亀裂さえあった。動物の群れに人がつきしたがって遊牧が始まった、という共有のアイデアを1948年にいち早く披露してしまったからである。

2人は共に、内モンゴルで家畜の群れを観察していたが、帰国後、それぞれ異なる群れを研究するようになる。今西は、宮崎県・都井岬でウマを観察し、そこでサルに出会う。一方、梅棹はヒツジの代わりにオタマジャクシを観察する。

ウマは種オスを中心としてまとまるのに対して、ヒツジはオタマジャクシで代用される程度に均質な集団である。こうした研究対象の違いは、両者のまなざしの特徴を反映しているだろう。梅棹は、垂直的な構造よりもむしろ水平的な構造を求めたのだった。

現在は、突出したリーダーが社会を牽引してこれればついていく、という旧来型の理想がもはや通用しない時代である。フラットになりつつある社会での新しいフォロワーシップが求められている。

(国立民族学博物館教授)

梅棹忠夫氏の研究室。14日まで開かれた特別展「ウメサオタダ才展」で公開された資料が戻り、今後、梅棹アーカイブズとしての整理を待つ。大阪府吹田市の国立民族学博物館